

第5期町田市民文学館運営協議会第1回議事録

- 開催日時 2020年10月20日(木) 18:00~20:05
- 開催場所 町田市民文学館 大会議室
- 出席委員 会長 渡邊正彦
副会長 竹内栄美子
委員 阿部哲也
委員 熊谷玄
委員 瀬川ゆき
委員 長尾洋子
委員 名取玲子
委員 平井宏典
委員 吉田孔一
- 事務局出席職員
市民文学館担当課長 江波戸恵子
担当係長 加藤剛
担当係長(学芸員) 神林由貴子
主任 小泉仁美
主任(学芸員) 山端穂
主任(学芸員) 谷口朋子
- 資料
資料1 「町田市民文学館あり方見直し方針」に基づく2020年度の検討内容について
資料2 文学館事業体系図
資料3 2020年度 市民文学館担当の「仕事目標」
資料4 開館からの利用状況の推移
資料5 2019年度事業実績
資料6 町田市民文学館ことばらんど所蔵資料一覧
資料7 新型コロナウイルス感染症の影響(現状報告)
- 次第
開会
1 委員自己紹介
2 事務局自己紹介
議事
1 町田市民文学館運営協議会会長、副会長選出
以下のお二方に決定
会長 渡邊正彦
副会長 竹内栄美子

2 討議

(1) 町田市民文学館のこれまでの経過と 2020 年度の検討内容について

【事務局】 資料 1～7 に沿って説明

- ・①文学館の「めざす姿」を実現するための事業、②文学施設における ICT の活用、③芹ヶ谷公園“芸術の杜”プロジェクト「パークミュージアム」オープン後の駅前の文化施設の位置づけと文学館の役割など、ポストコロナ時代に、文学館など文化施設に求められることについてご意見をいただきたい。また、以上のことを前提にした、当館の効率的・効果的な運営手法についてもご意見をいただきたい。

【議長】 事務局のこれまでの説明に質問があれば受け付けたい。

【委員】 文学館は教育委員会の直営か。

【事務局】 教育委員会の直営施設である。

【委員】 展示は全て無料か。

【事務局】 通常は年 4 回展覧会を開催しており、そのうち 1 回が有料で、3 回が無料である。今年度は新型コロナの影響で展覧会を変更しており有料展は行わない。

【委員】 教育普及事業は参加費をとるのか。

【事務局】 原則無料である。

【委員】 文学館は登録施設か、類似施設か。

【事務局】 その他施設である。

【委員】 効果的・効率的な運営を議論するのであれば、お金の使い方とか予算や事業費の内訳を見せていただけると有意義な議論が出来ると思う。

【事務局】 町田市で作成している「行政評価シート」を提示したい。

【委員】 職員の構成はどのようにになっているか。

【事務局】 事務職が正職員 3 名と会計年度任用職員 3 名の計 6 名で、学芸員が正職員 3 名と会計年度任用職員 3 名の計 6 名である。

(2) ポストコロナ時代に、文学館など文化施設に求められること

【事務局】

討議の前に、先ほど質問があった当館の事業予算等について、市が作成した 2019 年度課別行政評価シートをお配りした。次回このシートをもとにお話しさせていただきたい。(行政評価シートの概略を説明)

【議長】

それでは、「ポストコロナ時代に、文学館など文化施設に求められること」について、今後の審議の参考とさせていただくために、委員の皆様それぞれ立場から新型コロナウイルスによって大きく変わったこと、またそれに対する現在の対応や今後の展望などについてお話をいただきたい。

【委員】

デジタルデバイスはこういう状況下でいろいろな可能性を秘めていると思う。実際に、例えば大学とか観光業界ではこれまでリアルでやっていたことをオンラインに移行して、町歩き的なミニツアーをオンラインで工夫して

紹介とか人をつなぐということでは出来ないかという模索がものすごいスピードで進んでいるという印象がある。なので、財政面やマンパワー的なものやスキルのものが調達できるならば、オンラインの企画を取り入れていくような方向にしたらいと思った。小規模な関連企画や町歩きのものやワークショップなどは実行可能なのではないか。大学でも一定の配慮をすれば対面の授業も出来るようになってきているし、観光業界でも圏内では割と盛んになりつつある状況にある。ソーシャルディスタンスを保ちつつ、繋がっていくという方向性はどうかと感じた。

【委員】

デジタルコンテンツについて、私は美術館、特に現代アートを研究対象としているが、例えばインスタレーションを空間演出するような作品を単純にデジタルコンテンツにするという、ユーチューブで画像を見せたり写真を撮ってツイッターやSNSにあげたりしても何も作品の本質的なものは伝わらないと思っている。もともと生で観ていただくことを想定した作品をただ単に写真に撮ってデジタルにしたとしても、そこに博物館的な意味とか資料の持つ感動は出来ないと思う。これから館に人を呼び込めないという時にデジタルなもの、そういったコンテンツを作っていく時に単なる映像の焼き増しというやり方はあまりよろしくない。きちんとデジタルに合わせた形で資料をどのように発信していけるのかということを一から考えていく必要があるのではないか。もう一つ、博物館の経営評価で入館者、来館者が1つの大きな指標になっていて、どれだけ館に多くの人を呼び込むのかがポイントになっていたが、これからは館に人を呼ぶという経営モデル自体に依存することが不可能になってくる。博物館のもつ資料や知識を館に来ない多くの地域の人々に届けられるかを検討していく段階になっている。アウトリーチや出張展示で、博物館に来館しなくても博物館と関わりのある方々を如何に地域内に増やしていくかという観点から博物館活動を見直していかなければならないと思う。

【委員】

私自身がデジタルから置き去りにされている人種で、ここの私が日常暮らしている中で地元の人間を見ていると、どちらかというとデジタルからかけ離れた世代のちょっと上の人間だとか、すぐそばにこの施設があるにもかかわらずなかなかここに足を運ばないという方たちとの接点大きい。若い方の進んだものとは全く逆方向のものが身近にあって、先ほど小さいグループであれば考え方とか設定の仕方で可能という意見があったので、私の立場では小さいグループで出来ることを何か考えてそれを増やしていくとか、デジタルで世界中どこに向けてもという一方で、すごく的を絞っていても出来る方向を見つけたいと思う。

【委員】

今話を聞いていて、同じ悩みを抱えている。先ほど6割減という話があったが、私の体感でもそう思う。これまでの成功体験から、集客目的でいくとマンガや著名な絵本作家、イラストレーターやデザインに絞って展覧会を年

に1度か2度開催するようにして、そこで人を集めて、経費も稼いで、人の来ない文学の展覧会の予算も何とかカバーしてきた。この夏、安野モヨコさんという今トップクラスの作家さんの展示を開催したが、2万人の目標が1万人という結果であった。先ほどお話があった、どれだけ多くの人を呼び込むかというモデルでないことを真剣に考えていかなければならないと日々実感している。一方で、ワークショップや子どものためのトークショーを、ズームを使ってやってみた。1つは哲学カフェという、十何人かの中学生から80代の参加者が宮沢賢治の「雨ニモマケズ」を読んで感想を言い合うもので、これは意外にリアルでやるよりもズームの方が皆さんしゃべりやすかったようである。それと講演会では先生が秋田で参加者が全国各地という、リアルでは実現できなかったであろうプログラムを作れたのはすごく良かった。子どもは教育普及を「どこでも文学館」と名付けているが、真の意味での「どこでも文学館」が実現できたと思っている。ただ、ズームによる講演会、ワークショップも、それをよくやっているグループに聞くとだんだん参加者が減ってくるようだ。自粛の間はそれでも十分楽しかったけれども、本当は人と人とのつながりを求めている。ということで、先週土曜日によく15人限定で席を離してショートショート小説を書くというワークショップを再開したところである。ズームやインスタグラムを使ったプログラムも通常だったら空間的に離れすぎている人とも交われるということで十分可能性があるのではないかと思う。デジタルコンテンツの配信は模索しているところだが、ホームページは最新のものにしないとなかなか難しいと実感している。

【委員】

これまでは人は可処分所得を何かに費やすというライフスタイルだったが、コロナになってむしろ可処分時間が出来てきたのかなと思う。町田に住んでいて片道1時間かけて都心に通って1時間かけて帰ってくるという2時間を町田で過ごすという時間が出来ている。そういう時間の受け皿に文化や芸術はなるべきではないか。いかにコンテンツを届けるかという問題は勿論あるが、町田で暮らせる時間をどう提供するかみたいなことが考えられるのではないか。そういう時に館だけでは難しいかもしれないが、例えば公園で何かコンテンツをすとか、密にならずにやる方法はたくさんあると思うので、自分たちが持っているコンテンツを町田のフィールドの中でどう展開していけるか。そこで町田の人たちが町田で過ごす時間をどのように提供できるかみたいなことを考えられるきっかけになったと感じている。僕らの運営しているアートステーションのある小さな住宅街は、横浜から電車で20分行って、そこからバスで15分行った古い団地だが、その人たちは全員毎日1時間半かけて東京なり横浜の中心部に通って夜遅く帰ってくるというライフスタイルをしているので、町に1時間なり2時間なり居られる場所がほとんどない。けどステイホームですっと家に居たら、団地なので45㎡くらいの中に子供もいて奥さんもいて自分もいてワーっとなる、そういう時にちょっと逃げるみたいな場所が全くない。全くないということに気づい

て全員が散歩している。僕らは本当に小さなアートカフェをやっているが、コロナになってからビックリするくらい人がたくさん来るようになった。今まで町におじいちゃん、おばあちゃんしかいなかったのに若い人たちがこんなにたくさんいるみたいな状況があった。そういうこともあるので、悪い事ばかりではないと思った。

【委員】

私は制作会社をしていて、以前はマス広告をやっていた。これから月9とタイアップして有名にしていこうという女優さんと安く契約して広く広告を作ってきた。ただ、そういう広告はトリガーにしかない。TVを見ていて、欲しいと思っていなかった人が広告を見たからこのシャンプーを買いに行こうとマツキヨに行くが、マツキヨに入ったら何を買おうとしていたか忘れてしまう。広告は、ファーストモーメントオブトゥルースのただのきっかけにしかない。それをレジに持っていきお金を払うというのがセカンドモーメントオブトゥルースである。ではサードは何か。お風呂場で実際に使うところがサードモーメントオブトゥルースである。それが良かったらまたそれを指名買いする、駄目だったら違うものを買おうとする。何かのイベント、何かのストラテジーを考える時には実体が全体的に必要な。そこに持っていかなければならないというのが今端的に出てきて、Eコマースにすぐ跳んでポチっとさせなければいけないという広告に変わってきている。今瞬時にこのモノが売れなければならないという時代になってきている。ポストコロナというのは実はアフターデジタルである。デジタルが2003年にハンドデバイスで皆自由になってどうなったかという、インバウンドの人たちが言葉の通じない日本に来て自由に動き回れている。言葉はいらない。これ（デバイス）が言葉だから。このデバイスひとつで地図もあるし、翻訳も出来る。そんな時代になったときにどうするかというと、もう実体社会はいらなくなっているということである。アフターデジタルというのはデジタルの次に何が来るのかということではなくて、ポストコロナに似て非なりというところがある。オフラインのない世界をどう生きていくかが今問われている。だから、ポストコロナだけを話し合うのではなく、このデジタル新時代に当館はどうあるべきかというストラテジーを考えなければいけないように思う。この会議が集客戦略を討議する会議なのか、それとも文学館の成長戦略を考える会議なのかということをごどこかで方向づけしなければいけないと感じた。

【委員】

ICTデバイスの活用について、町田の小中学校の現状に触れたいと思う。コロナになる前から町田市では電子黒板の使用が可能になっている。昨年までクロームブックという端末が1クラス分40台くらいあるから教室の全員に、子どもに配って出来る位の話であったが、このコロナのことで急加速して、多分今年中に5～6年生くらいくるのかと思っていたら、うちの学校も11月中に全児童に、1年生から6年生まで全員に端末が来ることになった。今後、子どもたちが全クラスで同時に全員が端末を使っていることもあ

りうるという状況になる。実際にはネット環境の設定やアカウントの初期設定など最初にやることがあるが、自分のマイアカウントを持っているので、子どもたちがマイパソコンを持って家に帰って一人で宿題をやるとかいろんなことが可能になる。ちなみに今年の運動会では密になれないということで、5～6年生は校庭にいて、1～4年生は出番以外教室でネットで見るようになった。ジャングルジムの上にカメラとパソコンを設定して、それが全部ネットで各教室のスクリーンに送られているというのが運動会の状態であった。デジタル庁でもデジタル教科書を近いうちにやるという話がでており、紙の教科書ではなくて子どもがマイパソコンを開いて授業を受けるということにいずれはなると思う。一方で、実はステイホームの中で、親子で読み聞かせというか絵本を手にとって何度も読み合って本が好きになったという話も聞く。デジタル的なものも、実際には休校期間中に学校からのホームページにアクセスできるようにして、いろんな学習が出来るようにしたいというのが始まりだったが、今後それがもっと進んでいくだろうし、1年生から使わせていこうという流れにもなっている。そういう部分と同時に、お母さんの声で読み聞かせをしたり、何度も同じ本を繰り返し手で触りながら印刷されたものをじっくり味わったりするのが好きだという子も逆に出てきているような気がする。

【委員】

私のところもオンラインの授業になって、研究会も読書会も全部オンラインでズームを使ってやっている。そういう意味では、移動しなくても遠くの人が気軽に参加できるというプラス点はあるが、一方でそろそろズーム疲れが出てきていて、今展示を観て、やはり生の原稿の手書きの力を感じた。オンラインのものとリアルのものとの二面でいかなければならないと思っている。そして、文学館は「市民の文化活動の拠点」と言われていたが、私もここでずっと読書会を、退職された方とか子育てを終えられた方とか女性が多かったが、ずっと皆と一緒に本を読んできて、市民の教養形成の拠点ということが求められているのではないかと思う。その市民の教養形成の拠点はオンラインでも可能だし、リアルな会議で皆で読み合っ意見をもつことも必要だと思う。二面方向で攻めていくことが大事だと思う。

【議長】

今いただいたお話を踏まえて、次回協議会ではこの課題について深めていければと思う。ポストコロナ時代におけるICTの活用についてという点で、意見をもう少しお出しただければと思う。ポストコロナというのは多分ワクチンが開発された後という意味だと現状では思うが、多分ワクチンが開発された後もワクチンが開発されたことによって全くコロナが起こる前の状況に戻っていくという事はありえないだろうと思う。そういう中でICTがこういう施設の中でどのように活用されていくべきなのかということについてももう少し何かあればお話しいただきたい。

【委員】

マーケティングをしている立場からするとすごく明確になってしまうが、

本当にオフラインがなくなってしまう。昨年9月に5Gが日本でスタートして、まだデバイスが整っていないので、そこまではコンテンツもソフトも開発され尽くしていないが、きっとこのポストコロナで全部表に出てくると思う。そういう政策も今やっている。ポストコロナという言葉の中には、元の世界に戻れるだろうという可能性を感じている。でもアフターデジタルは、デジタルが主体となって動いているわけだから、そこにアジャストメントが必要になってくる。それがICTだと思う。UXもそうだし、DXもそうだが、一つ考えなければいけないのは、デジタルの社会で子どもたちの教育、私たちの生活がどうなるかということだけを考えていかないとスピードに追いつけなくなってしまう。だから、ここがイニシアチブを取って何かをするということについて討議したほうが良いと思う。

【委員】

ICTの活用は、今どの分野で一番やりたいのか、効果として期待しているのか聞きたい。技術としてはあらゆる場面で使えるわけだから、博物館としてはどうなのか。

【事務局】

やりたいことと手段が結びついていない、方法が見つけられていないという状況である。ただ、学校にクロームブックが入って、子どもたちに全員配られるということなので、来年度はそれを活用できるような事業を計画しているところである。

【委員】

北海道大学でICTの利用状況について調査した論文が出たが、だいたい日博協に記載されている1180位の館の約半数がコロナの状況を踏まえて新たにデジタル発信をし始めた。その中で全体の3割くらいがSNS、2割くらいがユーチューブという状況であった。新しいサービスを独自に開発してやっているところはほとんどなくて、既存のサービスを手っ取り早く使って、現状だとほとんどが休館して観ていただくことが出来ない展示の切り売りというか、そういう形でユーチューブとかツイッターでやっているのが現状である。これから博物館がデジタルを使っていくかということになると、来館を望むだけではなく外には言ったが、やはり博物館である以上資料を生で観ていただく感動は絶対大切なことなので両面をやっていく。その両面を繋ぐための手段としてデジタルをうまく使っていく。結局来なくても見ることが出来てしまうということではなくて、デジタルのコンテンツを見たから来館に結びつくとか、博物館と直接的に関係性が結べるという使い方をしていくことがいいのかなと思う。私は、「茅ヶ崎ゆかりの人物館」の企画に携わっているが、海とスポーツというテーマで今やっていて、インスタグラムを始めて「茅ヶ崎の海の写真を是非ハッシュタグをつけて投稿してください。素敵な写真は、勿論許可をとって、プリントアウトして館にも展示します」と。そうすると、今まで当館に関心のなかった層から非常に多くの反響があって、カヌークラブとか湘南なのでサーフィンをやっている団体とか、そういうところから投稿があったりする。今まで繋がらなかったところ

にリーチする手段としてとか、今まで繋がらなかった人がもしかしたら館に足を運んで来てもらうきっかけになるかもしれないというような形で、単なるトリガーとしてではなく、もっと実際に来館して何かを体験してもらええる仕組みづくりとしてデジタルを活用していけると良いのではないかと思います。

【委員】

むしろ文学館はアフターデジタル時代の最先端にいるべきだと思う。さらにちょっと無理してでもデジタルの入り口を文学館に設定するくらいのやり方があるのではないか。というのも、デジタルを手にして皆ツイッターで気軽に発信できるし、昔は本を出そうと思ったら校正されてチェックが入って出したものをノーチェックで世界中に発信出来る。言葉の力は強い。それは暴力にも繋がるし、逆に誰かを救うことが出来るかもしれない。本当は言葉を貯めている場所だからこそ、言葉のアーカイブが文学館にあるのではないか。そこがあまり結びつかない。その言葉の扱い方だとか言葉の紡ぎ方みたいなものは、当たり前前にデジタルになった時に皆が持っていないければいけない知識や教養ではないかと思う。ICTを活用してどうこうというアイデアはないが、「まず文学を読め」みたいな、何か発言したかったらそれなりの文章を紡げるようになれよと思うので、そういう立ち位置はないのかというのをすごく感じる。常識として、リテラシーとして。これだけの先人たちが紡いできた言葉の中にきっと人を助ける方法もあるし、逆に傷つけないで言える方法などもあるかもしれないし、炎上を消火させるための言い回しがあるかもしれない。文学館は実はアフターデジタルのある意味では最先端の施設としてあるべきなのではないかという気がしている。

【議長】

今日はもう一つの話題である「芹ヶ谷公園パークミュージアムオープン後の文学館の位置づけ」について、何か意見はあるか。

【委員】

芹ヶ谷公園は町田の地形の中では面白くて「芹ヶ谷」というだけあって谷地形である。すごいV字谷になっていて、あまり活用できないところが緑いっぱいになっていて、緑の谷に挟まれた谷底空間に公園が細長く延びている。とても地形的にも面白いし、町田駅から歩いてきて芹ヶ谷公園に入ると一瞬で別世界になるみたいな場所である。ここはポテンシャルが高いのではないかとということで町田市でもここを活用していこうということで、かなり複合的にロングスパンで公園をどのようにしていくかという話がある。我々は第二期工事の整備に関わっている。町田市が「芸術の杜」という方針を掲げている中で、自然と文化に出会えるパークミュージアムというテーマで整備をしている。これまでは公園は利用しに行くものだったが、例えば遊具があって遊具で遊びに行くとか、グラウンドがあってサッカーをしに行くとか、そういう場所だったが、そうではなくて自分たちが主体的な活動母体となって、むしろ公園のホストとなって自分たちの活動をそこで行う。それを共有していけるような、そういうことをやっていく

と町田の自然や文化に出会える場所になっていくのではないかと。単純にどこかから持ってきた美術品を眺めているだけが文化ではなくて町田で活動している皆さんの一つ一つの活動すべてが文化に結びつく可能性があるのです。それをシェアしましょうという考え方である。進め方としては、まさに今計画中であるが、ハードの整備としては設計という行為があるが、その設計をするために「メイドイン芹ケ谷」という社会実験の実証実験プロジェクトを同時に回している。去年から始めて15～6回行っているが、芹ケ谷公園でやってみたいことを集めてみて、こういうことをしたらどのような問題が起きるかということを実験していきながら、それで足りないものをハード整備で補えるものはハード整備で入れていくということをしていながらやっている。例えば、芹ケ谷公園で朗読会をやりたいという人たちがいたときにどういう所で朗読会をすると朗読の効果が最大化されるのかみたいなことを公園の中で探していくとか、キャンプをしたいとか、火を炊きたいとか、ライブをやりたいとか、いろんなやりたいことを集めていながらそれをこの谷地形という特殊な地形のどの場所で行うと価値が最大化されるのかというようなことをやっている。今年はコロナで本当は大きなイベントを2～3個考えてやるつもりだったが、それができないままに設計が進んでいるが、2024年のオープンに向けてソフトとハードを同時に、「使う」と「作る」を両輪で回していきながらこの芹ケ谷公園を作っていくということを考えている。実際、版画美術館が公園でコンテンツをしたら何をするかとか、芹ケ谷冒険遊び場のマネージャーたちが版画美術館を使ったら何が出来るかとか、駅前の珈琲屋さんがコーヒーの文化を公園で広めるためには何が必要なのか、というようなことをしている。それで、文学館は町田の文化を担う大きな拠点の一つだと思うので、是非「公園×文学」というか「公園×ことば」みたいなもので何が出来るのかみたいなことをどんどん公園側に投げ込んでほしいと思っている。そうすることで、新しい文学の楽しみ方とか言葉の作り方とかできるのかなど。小さなことから大きなことまで、それこそ子ども俳句会などは芹ケ谷公園を歩いてやってもらいたいと思う。ちなみに芹ケ谷公園はポケモン発祥の地でもあるので、多分いろんな人たちがここで活動して、芹ケ谷公園で何かを思うことで、いろんなものが生まれる。まさに「メイドイン芹ケ谷」みたいなものが生まれていくとそれがゆくゆく文化の土壌になっていくのではないかと、という考え方である。なので、文学館のプログラムを考えると頭の真ん中辺に芹ケ谷公園を思い描いていただきたい。公園は密にならないし、雨が降ることもあるが雨すらも言葉に変えれば美しい何か紡げそうな気がする。公園側はそういう思いを持って設計を進めているので是非何かコンテンツを提供していただけるとすごく良いと思っている。

【議長】

これからもこういうことを議論する機会があると思うので、何かあればまた次へのたたき台にもなるし、何かご意見があればお話いただければと

思う。

【委員】

日頃大学生の様子を見ていると何かもっと公的な活動のフィールドとかサービスだとかを利用したらいろいろな面白そうなことが出来そうだし経験も豊かになりそうだと思う。しかし、大学というものがそこまで地域との結びつきが小中高と比べれば疎遠になってしまっている。大学という機関が地域と疎遠になってしまうと結局自分の目の届く範囲でしか、つまり個人的な趣味とか何かそういうものの範囲でしか動かなくなる。いろんな地域が提供できる可能性や情報も若い人からすれば入って来にくいのかなという実感がある。大学生くらいの若い人たちがもう少し公園、文学のようなものを知れば反応があると思う。そこを教員としても繋いでいかなければならないと思う。若い人が使っているデジタルデバイスへの積極的な発信と惹き込んでいくタイプの企画が求められるような気がする。多分出てくるものもダイナミックなものが成果として出てくるのではないかなと思っている。

【委員】

是非大学生を連れてきてほしい。この間も大学の人たちがいろいろとやってくれた。公園の良いところは、自分に興味のないものでも隣でやっていたりすると、それが新しい興味に繋がったりするところである。

【委員】

町田駅から芹ヶ谷公園に向かう導線が強調されがちだが、逆を行ってみたらどうかということで鶴川から緑の豊かな所にアプローチするにはどうすれば合理的かという発想でツアーを組んだことがある。そうすると、自分たちの行動範囲の逆転とか発想の転換みたいな中で谷地形の多い公園を経験でき、最後に版画美術館で美術を鑑賞することができた。これからも積極的にそういうものを大学で企画したいと思うし、体力、知力、アイデア感性の豊かな若い人たちが知的な部分と自然に親しむところから創造性を発揮できるような活動がこういった拠点で企画されると良いと思った。

【議長】

今日出たご意見は事務局にまとめていただき、次回の協議会でまたさらに深めていただきたいと思う。

3 その他

【事務局】

(1) 第2回～第3階運営協議会スケジュールの確認

このあと12月と2月に運営協議会を開催したいと考えている。次回は12月22日(火)の18時から20時で設定させていただいている。今回と次回で皆様にご意見を伺い、最後の回はまとめとさせていただきたい。2月の開催については、次回ご提示させていただきたい。